人を呪わば

国枝史郎

青空文庫

一

「あの、もしもし」
と女の声。
振り返って見ると白い物！　女が軒下で招いている。
午前三時！　深夜である。
「え、お嬢さん、何かご用で？」
一條弘、若き新聞記者。年齢二十四。慇懃に訊く。
場所は大阪。川口あたり。――
「一緒に連れてって下さいよ」
「だが、一体どうしたんで？」
「お願いですよ。……妹だと云ってね」
「ははん」と一條感付いた。こん畜生め！　地獄だな。
「ね、お願いですわ。助けると思って。……だって非常線が。……困っているのよ」
「よし来た」と義侠心を揮い起こす。「何んていうんだい、君の名は？」
「お君ってのよ。お願いだわ」

で、一緒に行くことにする。
「もしもし」と二三人が呼び止める。
私服の警官諸兄である。
「こんな夜更けに。女連れで……」
「やあ、今晩は」と一條弘。「何か獲物でもありましたか。……僕、記者ですよ。B新聞の」
で、名刺を進呈する。
「やあ」と直ぐに仲宜くなる。「少し遅いじゃありませんか。……で、連れのご婦人は？」
「ええ、僕の妹でね」
警官諸兄クスクス笑う。
ちゃあんと感付いているらしい。
それも其筈さ、似ていないんだから。だが、警官と新聞記者だ。昔から親友ときまっている。
「いいから愉快にいらっしゃい」
「アッハハハ、左様なら」
で、愉快にグッドバイする。
「君の家は何処なんだい？」
「××町よ、送ってって頂戴」
恐しく穢いみじめな家。

「この二階なのよ。寄っていらっしゃい」
「うーん」
と云い乍ら寄って了う。寝道具一式、鏡台一個。――商売道具だけは揃っている。
「もう遅いわ。泊まっていらっしゃい」
「だって無いぜ。金なんか」
「いい事よ。お礼だわ」
で、二人は幸福になる。

×

雀が啼いて朝になる。
「おい僕は失敬するぜ」
「いいじゃあないの、もっと在らっしゃいよ」
地獄奴、一條に惚れたらしい。一條その頃は好男子だった。
少し社のことが心配になる。女の顔をチラリと見る。まんざら踏めない顔でも無い。
「へ、かまうものか、休んで了え」
休むことなんか珍しくない。
で二人、復幸福。
その翌日出社する。

同僚が肘で横っ腹を蹴る。
「どうした――、え、昨日は？」
一條、厳粛な顔をする。「うん、実は、腹痛でね」
「おい、部長に叱られるぞ」
「え⁉」と一條飛び上がる。「何か有ったのか？　え、何か⁉」
同僚、無言で新聞を拡げる。
競争相手のA社の新聞！
一号活字、二段抜。
「西警察署の大捕物」
――ちゃんと綺麗に素破抜かれている。
「一條君！」
と部長の声！
そうさね、まるで雷のように響いた。
好漢一條氏の悄気方と来たら。
直立不動。部長の前。
部長美髯をひねり上げる。
「君、昨日は何うしたんだい？」

「え、実は、頭痛がして」
「家で静養でもしたのかい？」
「ええ、そうなので……医者を呼んで」
「不思議だね、こいつは不思議だ」部長ひどく不思議がる。「使をやったら不在と云ったが……」
やッ、一條の周章てまいことか！
「そ、それじゃあ、その時には……」
「よろしい！」と部長一喝する。「以後注意！　素破抜かれないように！」
一條一散に自席へ帰る。
さて、原稿紙は拡げたが、一体書くことがあるのだろうか？
その日一日マゴマゴする。
あっちへ行っては冷かされ、こっちへ行ってはこづき廻される。
退社時間。午後の四時。
一條そろそろ元気づく。

二

三四人悪友が集まって来る。
「おい、一條へカツを入れてやれ」
「悄気(しょげ)るな悄気るな、行こう行こう」
「ワーッ」というので飛び出して了う。
さて行先は？　珍しくもない、たこ梅というおでん屋だ。
で、其処での大気焔。
悪友A氏「俺が大臣になったらな。……」
悪友B氏「俺が洋行した場合にはな。……」
悪友C氏「我輩社長になった際にはな。……」
「な」「な」「な」と「な」ばっかり。そこへノッソリ這入(はい)って来たのは、A新聞社の西警察係、太田君という敏腕家。
「ヨ――」「ヨ――」と双方で云う。
しかし無邪気に話そうとはしない。
つまり競争の相手だからで。
「一條君昨日は何うしました？」太田君ニタリと重く笑う。「貴郎(あなた)が西署へ来なかったので、僕お蔭様で素破抜きましたよ」
一條に文句のある筈がない。

「左様なら」「左様なら」
で、太田君行って了う。
「一條の馬鹿奴、冷かされやがった」
A君一條をひどくカラカウ。
一條に文句のある筈がない。
「ああ酔っ払った、別れようぜ」
そこで一同散会する。
「お君って女、どうしているかな?」
一條鳥渡(ちょと)気にかかる。自然足がそっちへ向く。
いつか其家の前まで来る。
「今晩は?」
と声を掛ける。
「お上んなさい、二階に居ます」
宿の婆さんが頤(あご)をしゃくる。
チョコチョコと一條二階へ上る。
「いらっしゃい」
と云う女の声。お君の声と少し違う。

もっと別嬪の女がいる。
「おや、お君ちゃんは居ないのかい」勝手の違ったトボケた声。
「ええ、今夜は妾なのよ」
「ははあ此部屋は出張所なのか」
「ハイカラに有仰いよ、倶楽部かってね」
「ああ成程、私娼倶楽部か」
記者としては詩人に過ぎ、詩人にしては記者に過ぎる、不幸な美的記者の一條氏、倶楽部という言葉が気に入ったらしい。
「お君ちゃんが居ないなら失敬するよ」
「あら、妾では気に入らないの」
「なあに君の方が可いんだが。……」
よくないのは持ち合わせらしい。
「貴郎、新聞社の方でしょう?」
「ははあ、お君ちゃんが話したな」
「ええ然うよ、詳しくね。……でもよく助けて上げたわね。……妾、お君ちゃんと親友なのよ。……お礼心よ、泊っていらっしゃい」
友情掬す可きものがある。

何んの一條がかぶりを振ろう。
で、二人幸福になる。
雀が啼いて朝になる。
「今朝は早く帰らなけりゃあならない」
「せめて夕方までいらっしゃいよ」
不安乍らも居ることにする。
チリンチリンと夕刊の鈴。
一條女をして夕刊を買わせる。
一号活字。三段抜。
「西警察署の大捕物」
どんなに悄気たって追っ付かない。
つづけて二度も出し抜かれては。

×

「爾今出社に及ばず候」
一條の戴いた辞令である。

×

太田君とそうしてお君との会話。——

「一條って奴は名文家でね、同じ材料を使っても、彼奴が書くと活きて来る。同じ西署詰の俺に執っては、謂わば苦手と云う奴さ。……彼奴ひどく夜更かしが好きでね、毎々非常線に引っかかるそうだ。……そこでお君ちゃんを活用したのさ。……彼奴鳥渡詩人なんだよ。詩人と云う奴は飽きっぽいんでね。同じ女じゃあ不可まいと思って、そこでお絹さんにも頼んだのさ」

「では頂戴よ、あの人の分まで」

「よし来た、これが彼奴の分だ……」

十円札を蟇口から出す。

×

一條へ来たお君からの手紙。——

「これを持って今夜いらっしゃい」

十円の為替が這入っている。

「そうそう非常線に引っかかるものか」

一條為替を返送する。

三

お君不機嫌に独言を云う。

「あの人なんだか可哀そうだから、今夜呼んで太田の話を、ぶちまけて話してやった上、すぐに暮らしに困るようなら助けてやろうと思ったんだが、女から送った十円ばかりの金を、送り返してよこすような、そんな正義派の男なら、妾、見返ってもやりゃあしない」

×

こうして三ヶ月経過する。

A新聞社の編集局。

社会部長顔をしかめ、太田に向って小言を云う。

「近来書く物がひどく不味い。本来名文家じゃあ無いんだがそれでも三ヶ月前までは、活気のある文章が書けたのに。君一体どうしたんだい？」

太田心中で嘆息する。「競争相手を追っ払うのも、考えて見れば可し悪しだ。……一條の奴が居た頃には、負けまいと思って書いたので、活気のある文章が書けたらしい」

×

「爾今出社に及ばず候」

太田の受け取った辞令である。

「穴を二つ掘ったってものさ」

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集　全一巻」作品社
　　2005（平成17）年9月15日第1刷発行
底本の親本：「探偵趣味」
　　1926（大正15）年5月
初出：「探偵趣味」
　　1926（大正15）年5月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：湖山ルル
2014年4月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人を呪わば

国枝史郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/